

中学校における電子情報ボードを用いた文法指導の実践

兵庫県立芦屋国際中等教育学校 教諭 岩見理華

キーワード：中学校、英語、文法指導、電子情報ボード

1. はじめに

日本のように学習者が教室外で英語を使用する機会のない EFL 環境では、文法指導は実践的コミュニケーション能力を育成するうえで正確さを向上させる重要な役割を果たしている。しかしながら学習者の多くは教室で得た文法知識を実際の言語使用の場面で運用できず、その知識の定着も不十分であることが多い。

従来の文法指導では、単一文法項目を扱い専らその定着を図ることを目標としていた。本実践のねらいは、このような指導のありかたを捉えなおし、生徒に具体的な言語使用を意識させる指導を行うときに電子情報ボードを有効的に活用することである。

2. プロジェクトの概要

本校前期課程（中学校）第1～第3学年の生徒を実践の対象とし、他の文法項目と意味や機能が類似していて生徒が混乱し運用がむずかしいと感じる文法項目を選んで、電子情報ボードを用いた授業をデザイン、実践してその評価を行った。

本実践においては静的な文法知識を動的なものにとらえ、参与者間（教師、生徒、教材、教具すべてを含む教室環境）のインタラクションの過程の中で、実際の言語使用を具体的に意識した説明を通して、特定の言語形態がいかなる場面で、どのように意味を伝え、用いられるのか（Larsen-Freeman, 2003）を関連のある他の文法形態と比較しながら理解させた。そして検定教科書でとりあげられているような練習や対話活動を行ったあとで、実際の言語使用を意識した言語活動（高島、2000; 2005）を行わせることで目標文法項目の定着を図った。

本実践の特徴は、文法説明と言語活動において電子情報ボードの機能（画像・動画・音声資料等、現実の言語使用場面を意識したオーセンティックな教材の一体的提示、タッチペンを用いた板書機能、板書記録の保存機能）を最大限利用し、生徒とのインタラクションを通してダイナミックかつコミュニケーション的な指導を行うことにある。



成果と課題

以下の学年で目標文法項目（下線部）の指導を既習の文法項目との比較することなどにおいて行った結果、生徒の授業の理解度もおおむね良好で、授業に対する態度も好意的であった。

- ・第1学年 現在形と現在進行形 過去形と現在形
- ・第2学年 現在進行形と過去進行形、未来形 (will と be going to)、原級と比較級 能動態と受動態
- ・第3学年 過去形と現在完了形、分詞の後置修飾（現在分詞と過去分詞）

今後の課題としては、①教師が電子情報ボードの機能と操作について熟知し、指導法に合わせた効果的な機能の追加をメーカーに提案していくこと、②授業で使用した教材、指導案等を評価をもとに改良して整理・蓄積し、学習者の習熟度に応じて少なくとも校内において再活用する方法について検討していくこと、があげられる。

謝 辞

本実践研究を行うにあたり、東京外国語大学の高島英幸教授に多くのご助言をいただきました。深く感謝の意を表します。また、実践に協力していただいた本校英語科教諭、森本ルミ子先生と非常勤嘱託員、北畑あゆみ先生、外国語指導助手のメリッサ・ファムラ先生に対し、心よりお礼申し上げます。

〈参考文献〉

- Larsen-Freeman, D. (2003). *Teaching Language: From Grammar to Grammaring*. Boston, MA: Thomson/Heinle.
- 高島 英幸 (2000). 『実践的コミュニケーションのための英語のタスク活動と文法指導』。東京：大修館書店。
- 高島 英幸 (2005). 『文法項目別英語のタスク活動とタスク』。東京：大修館書店。